

讃岐新道

讃岐新道は、四国新道（総延長 280km）のうち讃岐国に属する道路です。路線は丸亀、多度津から猪の鼻峠までの延長 38.3km で、主に現在の国道 32 号と国道 319 号のもとになっています。

四国新道はもともと財田上村（現三豊市）の大久保謙之丞が構想したものでした。大久保は子どもの頃から、讃岐と阿波を遮る阿讃山脈の陰しく狭い道を、猪の鼻峠を越えて人馬が行き来する様子を見て、道をもっと平易で広い道路にすれば人の往来や物資の交易が便利に盛んになると考えていました。村の吏員、戸長になった大久保は猪の鼻峠に通じる道路の修繕や開鑿を進めました。その実績の上で、大久保は明治 17 年に丸亀、多度津より金蔵寺、琴平を経て、さらに池田、大杉を経て高知に達する四国新道の計画を提唱しました。この時、高知県では愛媛県へ通じる道路計画が練られており、四国新道には高知より佐川に出て須崎に至る路線と、佐川より松山、三津浜に達する路線が追加されました。

四国新道はスケールの大きな道路計画で、賛否の世論が起きました。大久保は協力者を求めて奔走し、明治 17 年 11 月に琴平で協力者の会合が開催され、明治 18 年 2 月には高知・徳島・愛媛の三県※で四国新道開鑿の申し合せが成立しました。各県議会で承認議決を得た後、明治 19 年 4 月に琴平神事場で四国新道の起工式が行われました。※当時、香川県は愛媛県に属しており、香川県が愛媛県から分離独立したのは明治 21 年 12 月でした。

讃岐新道は、まだ自動車のなかった時代に将来の交通を見通した計画を立てていた点に特徴があります。幅員は最少 3.5 間(6.3m)、最大 7 間(12.6m)と広大で、勾配が 0.55%～4.05%であり、金蔵寺から琴平の入口まで約 7km が一直線になっていることなどです。

讃岐新道の工事にあたっては、沿道の住民から屋敷や田畑の土地が削減されることに対して猛烈な反対があり、反対者は大久保を罵ったり、迫害したりもしましたが、大久保はますます意志を固くして工事の完成に力を尽くしました。また、大久保は予算以上の工事費の増大にも苦しみました。財田上村の戸川から猪の鼻峠までの工区は明治 19 年 9 月に着工されましたが、巖石が多くたびたび工事が中断して困難を極めました。愛媛県知事から村請負を命じられた大久保は、損金覚悟で工事を請け負い、明治 22 年 8 月の工期内に工事を完成させました。大久保はそれまでに新道実現のための運動費用や地元負担金に充てるための義捐金の拠出などに膨大な支出をしていましたので、父祖伝来の蓄えや田畑、山林のほとんどを人手に渡し、大久保家は困窮していたと伝えられています。

讃岐新道は明治 23 年 3 月に竣工、四国新道は明治 27 年 5 月に全線開通しましたが、大久保は四国新道の開通を見ることなく明治 24 年 12 月に 42 歳の生涯を終えました。三豊市財田上の国道 32 号沿いと琴平公園に大久保謙之丞の碑が建立されています。

<参考文献：四国の建設のあゆみ編纂委員会編「四国の建設のあゆみ」1990 年、香川県建設技術協会編「香川県土木史」1976 年、大岩義雄編「猪ノ鼻道路の今昔」2021 年など>

